

福島大学附属図書館報	No.35 2005.10.1発行
<h1>書 燈</h1>	
〒960-1293 福島市金谷川1番地 TEL (024)548-8083 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/ 携帯電話版 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm	
福島大学附属図書館	

「図書館はユーザが育てるもの」

共生システム理工学類 助教授 樋口良之

私は、図書館に浸りという性格ではありませんが、一年に数回、強い意志を持って図書館へ行きます。中学生までは、休日には、勉強したつもりか、本当に勉強したかはもう記憶にありませんが、図書館の本の記述の中で私にとっての重要事項をノートに書き写しておりました。高校生の頃から、何かに行き詰まったとき、新しい啓発を得たいとき、ものごとを体系的に整理したいときに、図書館へ行って本棚に並んでいる本のタイトルを見たり、興味を持った本の目次を見てきました。インターネット上で情報資料が見つけれないときに利用することもあります。私は、図書館の体系的に整理された本の荘厳な構えが嫌いではありません。

私は、しばしば、初めて入館する図書館で戸惑います。それは、私がもっとも図書館を利用した十代、二十代の図書館とずいぶんと様変わりしていることが原因です。場合によっては、入館から迷ってしまうこともあります。しかし、慣れてきたり、図書館の仕組みがわかってくると、なるほどと思うことが多いのも事実です。本学附属図書館でも、入館管理ゲート、貸出と返却の手続きなどの各種システム、図書館に足を運ばなくても蔵書を検索できたり、図書館内外の学術雑誌が検索できるシステムなど、実に多様なニーズに対応しています。

ある年の正月、仕事上でお付き合いすることになった図書館の方と年賀状を交換する機会がありました。図書館司書一筋で、もうすぐ定年になる方です。その年賀状に、私は、ハッとさせられる文章を見ました。

「図書館はユーザが育てるものです」

私にとって、その文章は衝撃的であり、その文章の前後に記されていた内容を忘れてしまうほどでした。私は、気がつきました。図書館にいろいろなものがあるのは、利用者の要望に耳を傾け、図書館の関係各位がその要望に取組んだ結果なのです。このため、図書館は利用者の特性などに応じて個性があるのです。利用者が図書館に関心を示さなくなり、図書館スタッフだけ委ねられたら、どうなってしまうのでしょうか。図書館スタッフは、きっと、潜在的利用者あるいはビギナーの利便性を考慮することに苦慮するでしょう。利用者は図書館に個性を与え、図書館のスタッフはその個性を具現化するための実務を担います。

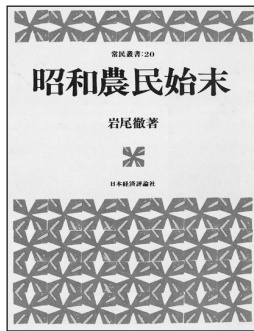
国立大学法人福島大学の附属図書館は、どんな個性を持っていますか。もし、個性を感じなかったら、ぜひ、図書館を一周することとWebサイトを見ることをお勧めします。必ず発見があり、その発見を活用したくなります。そして、その活用に不自由を感じたら、改善案を添えて図書館へコメントすれば、あなたは、個性的図書館の創造者です。今、図書館はユーザとスタッフの視点のほかに、ITインフラやコンテンツ提供ビジネスの観点などからも大きな影響を受け、近い将来、図書館の提供するサービスは、より受益者負担を求める方向に移行するかもしれません。図書館はユーザが育てるものであるならば、私たちユーザは、図書館の現状のみならず、今後の動向にも注目し、活用と提案のサイクルを継続する必要があると思います。

思い出の一冊 ～岩尾 徹 著『昭和農民始末』～

岩 崎 由美子

この本の著者は、私が以前勤務していたある研究所の先輩である。彼は、大学で教鞭をとる道は選択せず、いわゆる「調査マン」として各地の農村を歩いていた。故玉城哲先生らとともに彼が経験した農村調査の話は、「調査屋」の仕事に飛び込んだばかりの私にとって、胸躍るものがあった。例えば、「玉城先生は、浴衣姿に下駄履きでふらっと農家に出かけ、酒を飲みながらノートもとらず世間話をしていた。しかし、それはきわめて重要な聞き取り調査であり、先生は、どんなに酔っていても細かい数字まで鮮明に覚えていた」と。このような先人たちと、互いに議論を戦わせながら農村を読み解く視点と技法を磨いていった著者による農村調査は、かけ出しの私にとっての憧れであり目標でもあった。

この本で、著者は、数々の農村調査のなかで出会った農民の個人史をたんねんに描き出すことによって、昭和の農業、さらには昭和という時代そのものの歴史



的意味を探究しようとしている。そこには、水島工業地帯に隣接する小さな農村で、工場から出る粉塵被害に苦しみながらも野菜のビニール栽培に精を出す農民や、農協の営農指導として「不動産経営」が堂々と位置づけられている埼玉県南部で、どうしても農業を継続したいと経営移転により新天地を求めようとする農民、あるいは、過疎に苦しむ中国山地のある集落で、かつての「活気にあふれ、桃源郷のようだった」集落をリンドウ栽培で再生しようと模索する老農たちの姿などがビビッドに描かれている。彼らの生活史には、大きく揺れ動いてきた日本農業の光と影が投影されており、そこには人間存在そのものを賭けた闘いがあった。このような「儲けることはあまりうまくなかったが、なにやらひたむきに農業に取り組んでいた」ひとりひとりの農民に向けられた著者の確かなまなざしは、今も、私にとっての憧れであり、また目標であり続けている。(行政政策学類 助教授)

「コミュニケーションの大切さ」 —カウンターの内側から— 吉 田 希

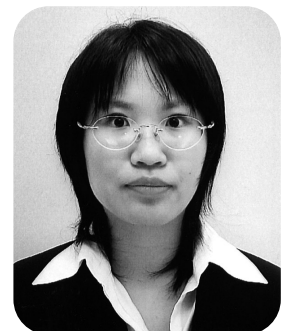
図書館でのアルバイトを始めてから、はや一年半がたちました。試験勉強のために図書館に頻繁に通っていたのですが、アルバイトを始めてから、図書館の利用方法について知らなかったことがたくさんあることに気がきました。

まず、本学にない本はないのなら仕方がないとあきらめていました。また、返却期限が3000年や2020年になっている本（これらの本は、研究室貸出になっている本です）は、不思議に思いながらも、貸出できないとあきらめていました。そして研究室貸し出しになっている本は、研究室にあるのなら仕方がないとまたあきらめていたのでした。これらの本は、カウンターで申し込めば、貸し出し可能なものもあることを知らなかったのです。

さらに、文献、新聞記事の調べ方についてもよく分かっていませんでした。文献は、本の最後にある参考文献から調べたり、新聞記事は縮刷版の見出しで該当する記事がないか調べていました。このようなやり方では、莫大な時間がかかってしまいます。しかし、図書館では

簡単に調べることができるweb catなどの検索システムがあったのです。

図書館の利用方法についてあまり知らなかった理由は、分からないことをそのままにしていたことにあると思います。やはり、図書館の利用方法について学ぶ最短の方法は、分からないことは、何でも聞いてカウンターのスタッフとコミュニケーションをとることだと思います。分からないことや困ったことがあったらカウンターに問い合わせてください。ただし、罰則がついてしまったので消して欲しいというご要望には、応じることは出来ませんが。ここで紹介した以外にも、沢山の便利な利用方法があります。カウンターに来てコミュニケーションをとれば、きっと図書館をより活用することができると思います。



その昔 福島大学の近くにあった図書館

曳尾堂文庫

渡 邊 武 房

伊達郡上保原村高子の儒者・救貧事業家熊坂台州（1739-1803）とその子盤谷（1767-1830）などが代々収蔵した蔵書のこと、白雲館文学活動の母胎となった文庫のことです。

白雲館とは熊坂氏の居宅の号で、ここを舞台に宝暦・明和から文化・文政にかけて、東都の知識人たちにも名声をとどろかせた漢詩文の文学活動が展開されました。

その書庫を曳尾堂と称し、その上面には大槻磐溪の書になる扁額がありました。命名の由来は、仕官して束縛を受けるよりは、貧賤でも郷里に安全を謀る方（泥の中を尾を曳き這いずり回る）が勝っているという喩（『莊子』秋水篇の故事）によっています。

1929（昭和4）年にこの文庫（半沢家曳尾堂）を調査した小川琢治博士は「…宋元古槧本は一も見當らぬが、明清刊本には精良なるもの少なからず、經史集に涉つてゐるから學者の研鑽に利用される便宜は米澤圖書館に比して却つて多いかと想はれた」（『米澤訪書記』『支那學』第5巻3号（1929）p 189）と述べています。国学・漢学を中心に所蔵されており、その内容は『曳尾堂蔵書目録』によって窺い知ることができます。

家運衰えた幕末の頃（文久年間）、山形県東村山郡出羽村漆山（現南陽市）の豪農半沢久次郎のもとに移り、1950年には古書籍商の手によって完全に散逸してしまいました。その一部は汲古書院が刊行した『影印日本隨筆集成』（長澤規矩也編 全12輯 1978-79）の底本となり、そのなかの『正學指掌』

第7輯所収)には台州自筆の書き込みがあります。

台州が曳尾堂文庫に関して書いたものに「曳尾堂の壁に題す」「曳尾堂蔵書目録の序」の2文があります。前者には「曳尾堂蔵する所の書籍、唯ただ就いて而して読むことを許す。借り去ることを許さず。郷党の士もし就いて読むものあらば、吾將に文不識、臯伯通とならんとす」（『永慕後編』下）と記しました。散逸の原因になる借覧を厳に禁じ、館内での閲読を大いに勧めたわけですね。文不識は、漢・東海の人で蔵書家。雇われて働きながら書を読むことを求めた匡衡に対して、感歎して書を与え、遂に大学者に育てました。

（参考資料）

- ・ 「曳尾堂文庫－文庫めぐり－」（〔山形県立〕『図書館だより』第28号 1961）
- ・ 保原町史編纂委員会編『保原町史』5巻（文化・教育）（1985）p 151～183



熊坂家墓地

Topic!

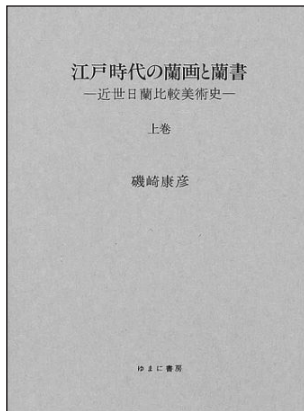
本学卒業生 中村文則さん
芥川賞受賞!!

本学卒業生の中村文則さんが「土の中の子供」（『新潮』2005年4月号）により第133回芥川賞を受賞されました。

図書館では、単行本・文芸誌を多数取り揃えております。どうぞご利用ください。



学内教員著作寄贈図書を紹介



『江戸時代の蘭画と蘭書』
ゆまに書房 2004.4上巻 2005.3下巻
磯崎 康彦 著

封建社会の孤立的地位を脱却した明治は、欧米の自然科学のみならず、学問・芸術を積極的にとり入れた。しかし、これら西欧の追究は、鎖国下の江戸時代において、すでにおこなわれていた。オランダ語を介しての西欧の学術研究、つまり蘭学がそれである。

蘭学当初の対象は、西欧医学・解剖学を中心とし、天文学・地理学などの学習であった。しかし時代を経るにつれ、化学・兵学・砲術などの学習が重要となった。

西欧の美術を学ぶ動きも、蘭学の一部であった。かれらは蘭画家とか、洋風画家という。かれらは、西欧の画家から直接指導されたことはなく、舶載された銅版画やオランダ語の書籍から画論・画法を学んだ。では、かれらはどのような蘭書から西洋画論をどう学んだのか。またどのような銅版画から、遠近画法や陰影画法などの画法をどう学んだのか。これらの学習の跡を懇切丁寧に追究したのが、上下巻からなる『江戸時代の蘭画と蘭書』である。一読頂ければ幸いです。(文：磯崎康彦 所在：学内刊行物コーナー 請求番号：721.7/185e)



『研究開発従事者のマネジメント』
中央経済社 2004.5
三崎 秀央 著

企業における知識創造の主役である研究開発従事者は、専門家としての顔と企業に勤務する組織人としての顔を持っている。しかし、専門家社会の価値観と企業目的に即した行動は、必ずしも一致しない。いわゆる二重のロイヤリティの問題である。

的な行動だけでは、企業目的へ貢献することは難しい。一方で、企業内部だけに目を向けるローカルの行動だけでは、先端知識に疎くなったり、外部の有益な情報を軽視する傾向がある。

本書では、二重のロイヤリティの問題を、従来のように専門家が組織人か、という単純な二者択一的解決ではなく、組織における知識創造という広い視点から捉えている。本書では、専門性の追求と、組織に点在する知識をひとつの製品として統合するという相反する要求にこたえるために、二重のロイヤリティが寄与することを実証研究によって示している。本書の分析結果は、研究開発従事者のマネジメントだけではなく、スペシャリストかゼネラリストかという議論に対しても一定の含意があると考えている。

多くの場合、専門家社会の価値観に基づいたコスモポリタン

(文：三崎秀央 所在：学内刊行物コーナー 請求番号：336.17/Mi51k)



『子供たちに伝えたい 校長先生のお話』
翰林書房 2005.5
澤 正宏 著

私が福島大学教育学部附属小学校長を2000年4月から2003年3月まで兼任していた間に、主に全校朝の会で児童へ話した内容を、ほぼそのまま毎月まとめた本です。

り、この本ではなるべくそういう雰囲気が伝わるようにと工夫してみました。

書名にもあるように、本当は子供たちに伝えたい話ばかりですので、本にするのを考えてはなかったのですが、保護者の皆さんからの、まとめてみてはいかがですかという勧めにおされて、出版に踏み切りました。内容は、21世紀を担っていく子供たちに知っておいて欲しいと思われる内容を精選してみたもので、季節の移ろいから、植物、動物、人間の進化、地球の歴史、星や宇宙までに及ぶ現代の広大な事象の世界を分かりやすく話したものです。予想に反して、学校現場の先生方や大人の方々からの多くの感想を頂いています。(文：澤 正宏 所在：学内刊行物コーナー 請求番号：304/Sa93k)

元々、子供たちに向けて話した内容なので、分かりやすいようにと、音楽や写真や図式や実物などを使ったり、示してお



『憲法24条+9条』
かもがわ出版 2005.3
中里見 博 著

「憲法改正」論議の焦点のひとつとして、「個人の尊厳」「両性の本質的平等」という家族全般の原理を定めた憲法24条改正問題が浮上している。この条文の「両性の平等」部分を削ったり、国家の家族保護義務とならんで、国民の家族扶助義務や「親を敬う精神の尊重」義務を追加したりしようという案

が、マスコミ（読売新聞など）や自民党から出されているのである。このように大胆で重大な提案なのだが、マスコミや社会では余り注目されていない。

本書は、24条改正論を、現代の改憲論議全体の中に位置づけ、社会保障制度の縮小・解体（25条改正）と軍事国家化（9条改正）とそれが深く結びついていることを論じる。そのうえで、24条の制定過程での論議にまでさかのぼってその原点を探り、また戦後の憲法学説の変遷を追う。さらに、今日の「ジェンダーの視点」から24条を眺めなおし、それが家族内暴力の禁止や男女の性別分業の解消という、積極的で現代的な意義を有している、と論じる。

（文：中里見博 所在：学内刊行物コーナー 請求番号：323.1/N42k）

こんなものがあったのか!! 「天気を予知することわざの数々」

教育学研究科 1年 平野 貴 司



『ことわざから読み解く
天気予報』
日本放送出版協会 2003.10
南利幸 著
(請求番号:451.2/Mi37k)

私たちは天気によってその日1日を大きく左右されるため、特に何かイベントがあるときには前日の夜に次の日の天気予報を見たり、当日の朝にもニュースでその日の天気を再度チェックしたりすると思います。そんな時、「天気の具合はどうかなあ」と考えていますよね？

現代では、天気予報という大変便利な情報が手に入りますが、昔はそのような便利なものは存在しませんでした。では、昔の人々はどのようにして天気を予測していたのでしょうか？それはことわざだと言われています。昔の人々は身の回りの状況や生き物の動きの変化、海や山の様子、風の動きによって天気を予測していたようです。

そこで今回は『ことわざから読み解く天気予報』という本を紹介したいと思います。この本には日本各地に伝わる天気に関することわざがたくさん盛り込まれています。天気に関することわざ？と思う人もいるかもしれませんが、例えば「ツバメが低く飛ぶと雨が降る」ということわざを聞いたことがある

と思います。これはツバメが天候を感じ取って飛ぶ位置を変えるのではなく、餌としている虫が低気圧になると低い位置を飛び、その虫を捕まえるためにツバメも低い位置を飛んでいるのだそうです。

様々なことわざがこの本に書かれている中で、私は「猫が顔を洗えば雨」ということわざが気になりました。猫が顔を洗うというのは、猫が顔を掃除しているようになでていることで、眉やひげの感度が鈍らないように、体についた汚れや余分な毛を落とすためにする行動のようです。雨が近づくと湿度が上がり、猫の毛がベタつくため、そのベタつきをとるために顔を洗うような行動をとるそうです。猫のひげは洞毛と呼ばれ、触覚のアンテナとして機能的に重要な部位であり、洞毛1本1本に対応した部位が脳の中にあります。そのため人間のひげとは異なり、猫にとってひげは大変重要な役割を果たしているようです。天気を表すことわざは全国各地にあり、その内容も様々ですが、中にはこのように科学的に説明できるものもあります。

ことわざはもともと身の回りの出来事から生まれたものが多いので、昔の人はよく周囲を見渡していたのでしょう。私たちもことわざから「あっ、明日は雨かな」と自然に周囲を見渡せるくらいゆとりが出来たらそれはそれで楽しいかもしれませんね。

図書館利用者協議会報告

図書館専門員 小 椋 正 行

さる、7月6日（水）に図書館利用者協議会を開催しました。ここでは、利用者協議会とは何か、今回のテーマ、そこで話し合われた内容を簡単に報告いたします。

まず、利用者協議会は附属図書館の利用に関する諸問題を協議することを目的として図書館長の下に設置されており、図書館資料及び施設・設備の利用について利用者の便をさらに向上するために利用者である学生・教員・職員と図書館とで具体的事項を協議する場です。委員の構成は図書館長、教員委員として各学類図書館運営委員会委員、全学の事務系職員から選出された職員委員、各学類及び研究科を代表する学生委員、大学院生委員、図書館事務部の合計22名で構成され、過半数の出席により成立する仕組みとなっています。今回の利用者協議会は法人化後では初めての開催となりました。

今回の協議内容は、「日曜開館・開館時間延長」、「シラバス参考図書コーナー」をメインテーマとしました。附属図書館では平成16年12月に上記のテーマを中心として利用者アンケートを実施しましたが、その結果を受けての開催となります。「日曜開館・開館時間延長」は平成14年度に行った利用者アンケート結果で学生などから最も多かった要望を具体化したものです。①これまで休館日であった日曜日を開館する。②平日の閉館時間を1時間延長して22時までとすることを中心とした内容で、平成16年10月から試行を行ってきましたが、アンケートの実施は平成17年度に向けての検討材料として利用者からどのように受け止められているのか、入館状況、利用の実態等を把握することが目的です。また、平成16年4月より多くの教員の協力をいただきながら、シラバス掲載参考図書を一ヶ所にまとめ、「シラバス参考図書コーナー」を設置して学生の自主学習に供していますが、その利用状況を把握することも目的のひとつとなっています。

さて、利用者協議会には17名の出席があり、協

議が開始されました。まず、図書館からアンケート結果の概要報告、また、アンケートに多数寄せられていた要望事項への回答を説明し、各委員から意見を求めました。各委員からの主な発言は以下の通りです。

- 開館時刻について、日曜日・土曜日の10時は遅いのではないか。9時か9時30分には開館してほしい。平日の開館時刻も7時45分ぐらいにできないか。
- 日曜日の閉館時刻17時は早いので、もっと長くオープンしてほしい。
- 模擬授業を行っているので、平日の閉館時刻を22時過ぎまでにしてほしい。
- 休業期間中の閉館時間は早いのではないかと。
- 閉館時間が帰りの電車と合っていないのは困る。
- 日ごろは県立図書館を利用している。図書館はあまり利用していないので、状況がわかっていたらよかった。日曜日が開いていることを知らなかったので、今後は利用したい。
- シラバス参考図書が借りられないのは不便。借りられるように2冊用意してはどうか。
- シラバス参考図書の利用が低調なのは教員の責任もある。先生方へ制度の情報を流してほしい。
- 定期試験などの期間は貸出を制限しても、通常は貸出可能とする方法もあるのではないかと。
- 大学院生は、自分たちの都合に合わせて図書館を利用しているので、遅い分は気にならない。図書館にはジャーナルの充実を要望したい。電子ジャーナルは便利。研究室貸出などで借りたい本が借りられないのは困る。
- 携帯端末からOPACを利用したい。

今回の協議会は、予定時間をオーバーする活発な意見交換が行われました。利用者協議会の性格から、結論は出さないことにしていますが、図書館としては各委員から出された意見を真摯に受け止め、今後の運営の参考に予定しています。最後に利用者協議会は年2回程度開催することを確認して散会しました。



図書館耳より情報!?



こんなところに自動販売機が!



ロビーの「飲食コーナー」にカップ式の飲料自動販売機を設置しました。マナーを守ってご利用ください。

コイン式コピー機になりました。



台数も1台増えて2台になりました。これまでのコピーカードも使えます。著作権を守ってコピーしてください。

新聞閲覧台が新しくなりました!!



設置場所は入館ゲートを入った右手です。過去の新聞2ヶ月分もすぐに見られます。

教養演習「情報探索基礎講座」

～新入生を対象に、「情報リテラシー教育」実施～

学術情報係



今年度創設した共生システム理工学類の教員より、今年度の「教養演習」で情報探索方法を学習させたいという要請があり、「教養演習」の1コマ(90分)を利用して「情報探索基礎講座」を実施することになりました。学類新入生全員を対象とした授業として、この講座を計画実施するのは、今回が初めてとなりました。

教養演習「情報探索基礎講座」は、マルチメディア室を使用して、5月17日(火)を皮切りに9クラス(9回)実施しました。「図書情報」「雑誌情報」「新聞情報」のそれぞれの探索方法について説明し、OPAC(福島大学蔵書検索)を始めとする数点のデータベースについては、例題を使って実際に情報探索を体験していただきました。

授業終了後に実施したアンケートでは、9割の方から、「大変参考になった」または「まあまあ参考になった」という評価をいただきました。寄せられたご意見の中には「1年次にこの講座を聴いていなかったら卒業まで知らなかったかもしれない」というものもあり、入学時における情報リテラシー教育の必要性を実感させられました。また、内容への意見や要望をいただきましたので、今後は内容の改善に努めていきたいと思えます。

情報リテラシーとは、情報が必要なとき、それを認識し、効果的に発見、評価、利用する能力であり、情報探索・利用のための技能・知識によって構成されます。これまでも、本館では、学生の情報探索・利用のための技能・知識習得をサポートするべく、希望者を対象に「情報探索基礎講座」として、情報リテラシーの学習機会を企画してきました。この度、授業として行ったことは、「情報リテラシー教育」実施と言えるものとなりました。学年が進むにつれ、さらに詳しい探索方法や、「電子ジャーナル」などの利用方法を身に付ける必要性が出てくると思えます。「情報探索基礎講座」「同講座オーダーメイド開催」をさらに充実させて行きますので、ぜひ参加して、スキルアップを図ってください。

目次

- 巻頭言「図書館はユーザが育てるもの」.....樋口 良之 (1)
- 思い出の一冊『昭和農民始末』.....岩崎由美子 (2)
- 「コミュニケーションの大切さ」—カウンターの内側から—.....吉田 希 (2)
- その昔 福島大学の近くにあった図書館～曳尾堂文庫～.....渡邊 武房 (3)
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
 - 『江戸時代の蘭画と蘭書』.....磯崎 康彦 (4)
 - 『研究開発従事者のマネジメント』.....三崎 秀央 (4)
 - 『子供たちに伝えたい校長先生のお話』.....澤 正宏 (4)
 - 『憲法24条19条～なぜ男女平等がねらわれるのか～』.....中里見 博 (5)
- こんなものがあつたのか! 「天気を予知することわざの数々」.....平野 貴司 (5)
- 図書館利用者協議会報告.....小椋 正行 (6)
- 図書館 耳より情報!?.....情報サービス係 (7)
- 教養演習「情報探索基礎講座」～新入生を対象に、「情報リテラシー教育」実施～.....学術情報係 (8)